

# 「デカルトから某氏への書簡 (1641年 8 月)」 訳解

A Letter from Descartes to X, August 1641

山田 弘明  
Hiroaki YAMADA

本稿の取り上げる手紙は、先に出された反論（「某氏からデカルトへの書簡」1641年 7 月）に対するデカルトの答弁である。論点は反論に沿って14点ある。なかでも、心身関係、生得観念、永遠真理創造説などの話題には、この手紙ならではの議論の発展が読み取れる。その点で貴重な文献である。デカルトは、当初それを『省察』の付録に組み入れるつもりで力を入れて書いており、これは手紙の形式ではあれ一つの論文をなしている。以下では、それらの論点を明らかにしたうえで全文の翻訳を試みる。

This letter, from Descartes to X in August 1641, is the answer to the objection written in July 1641 by X. There are 14 points, and especially those topics on mind-body relation, innate ideas and the theory of creation of eternal truths are very peculiar. In reality, this is not a letter, but an article. At first, Descartes had an intention of adding this with the objection in the appendix of the *Meditations*. In this paper, we try to translate it into Japanese with analysis and commentary.

キーワード：心身関係、生得観念、永遠真理創造説  
mind-body relation, innate ideas, creation of eternal truths

## はじめに

本稿は「デカルトから某氏への書簡（エンデヘスト 1641年 8 月）」(AT,III,421-435)<sup>1</sup>の全訳である。筆者はかつて「某氏からデカルトへの書簡（パリ 1641年 7 月）」の翻訳を試みたが<sup>2</sup>、この手紙はそれに対するデカルトの答弁をなしている。そこでも述べたように<sup>3</sup>、この往復書簡は『省察』の付録（「反論と答弁」）の最後に組み入れられる予定であった。それゆえ手紙とは言いながら一個の論文の体をなしており、内容的にも独自の思想の表明が読み取れる重要なものである<sup>4</sup>。「反論」の背景とその意義についてはすでに上の拙論<sup>5</sup>で述べたので、ここでは「答弁」の全体を概観してその要点を指摘するにとどめる。

論点は反論に沿って14点ある。ただ、デカルトはそのすべてについて網羅的に答えているわけではなく、重要と思われるものについてのみ重点的に議論をしている。1)は、真理に関して理論と実践とを区別すべきではないという反論に対するものである。デカルトはそれを正面から論じず、実生活においては厳密な確実性を要求すべきでない、とのみ答えている。問題をいわゆる暫定的道徳として処理しているわけだが、反論者の言う「思想と実生活との統一」は難しい課題として棚上げされている。2)は、精神と身体的痕跡との影響関係は特定できないという反論に対する解答である。デカルトは、「胎児の精神も思考する」とは胎児が自覚的に思考しているということではなく、胎児も

真理の観念をうちに持っており、身体にくびきを脱するにしたがってそれが自覚されるようになるということである、と説明する。また、精神は身体に痕跡を刻印し、かつその痕跡に影響される。精神がものを考えるとき、脳の小部分が外的対象や精気によって、あるいは精神そのものによって動かされ、その部分に痕跡が形成される、とする。幼児の例は生得観念のあり方を具体的に説明しており、きわめて印象的である。幼児の精神は身体と密接に結合しており、まだ内なる観念に注意が向けられないのである。また、松果腺に「痕跡」が形成され、そこに心身の相互関係の証<sup>あかし</sup>があるとしていることも注目される。しかし、その痕跡と精神とが具体的にどう関係するのか。身体的である痕跡がいかにして精神に影響を与え、非物的である精神がいかにして精気を動かして痕跡を形成するか。これは、心身の相互関係についてエリザベトが提起した問題（エリザベトからデカルトへ1643年5月16日 AT.III,661）と同じであるが、デカルトは詳しい答弁をここではしていない。

3) 信仰の真理は幾何学よりも明晰に知られるか、4) 明晰判明知の基準は人により異なる、5) 思考とは何かの意味が明確ではない、の三反論については積極的に応答していない。知ると信じるとは別のことであり、恩寵の光は自然の光に優先する、思考とは何かは自明の概念である、とのみ答えている。これらの問題は複数の反論者によってしばしば提出されたものであり、伝統的な思想を持つ当時の人たちがデカルトの議論のどの点に疑問を抱いていたかが浮かび上がる。デカルトは他の著作（たとえば『真理の探求』AT.X,524など）で繰り返し答弁を試みてきた訳だが、それによって両者の落差が埋められたとは必ずしも言えない。立場の相違がますます明らかになったのみである。

6) 無限の理解、精神の能力、独楽の運動、物体の存在の議論が不十分であるという反論に対しては、次のように言われている。すなわち、無限は通常、否定（限界）の否定によって表されるが、これによって無限の積極的な本性が認識される訳ではない。精神のうちに事物を増大させる観念や能力があるのは、精神そのものによるのではなく、それが神においてあるからである。独楽の回転運動（能動）は、そこには存在しないムチの作用の結果（受動）であり、能動も受動も同一事態である。物体の存在は、物体の観念が精神のうちにあることからではなく、それが外界から到来したことから証明される、と。これらの主張もデカルトの持

論に沿ったものである。精神の持つ諸能力も所詮は神に由来すると明言されていることは印象的である。また、能動と受動とが身体だけでなく精神のレベルでも同一であることは後の『情念論』（AT.XI,327-328）で展開される。

7) 数学のような真理は神の協力によらずに真であるという反論に対して、デカルトは全面的に否定している。すなわち、三角形の性質でさえも神なしには真でありえず、神の協力を失えば破壊され、無に帰する。実体とは神の協力を要しないものではなく、神以外の被造物なしにありうるものにすぎない、と。この種の反論は本テキスト以外にも多く見受けられる（たとえば「第六反論」AT.VII,417-418など）。それは、デカルトの永遠真理創造説が当時の神学者たちに簡単には受け入れられなかったことを示し、独自ではあるがそれだけ問題の多い説だったことを物語っている。8) 原因の無限進行や世界の永遠の昔からの創造（いわゆる世界の永遠性説）については、自分は述べていないと一蹴している。

9) 神の観念の生得性を疑問とする反論に対しては、潜在している神の観念を、顕在的には自覚していない場合があっても不思議ではないとしている。「生得的」とは、生まれつきある観念をつねに持っているということではなく、機会があればいつでもそれを顕在化できる「能力」（「第三答弁」AT.VII,189）あるいは「傾向や資質」（『掲貼文書への覚え書』AT.VIII-2,358）を持つという意味に理解するのである。これは生得観念に対する重要な説明であろう。

10) 神の目的は、すべてが神の栄光のためになされることにあることをデカルトは否定しない。しかし、神が人間から讃えられるためだけの目的で宇宙をつくり、人間に光を与えるためだけの目的で太陽をつくったとするのはおかしいとしている。デカルトは神による世界の創造という思想に与してはいるものの、人間中心的な世界観を拒否し、相対的な見方を提出していることが注目される。11) 意志の決定は知性の光なしにはありえないという反論については、そこには意志と知性との混同があると考え、意志はもっぱら欲することに関わり、われわれは知性で十分理解も認識もしていないものを欲することがある、としている。

12) 盲人には色の認識がないことからしても生得観念説は不合理であるという反論については、デカルトは色を認識できない盲人の証言を認めているように読める。しかし、盲人の精神がものの性質を獲得する能

力において劣ることはない、それゆえ、この例は色の観念の先天的な欠如を示すのではなく、色の観念の潜在を否定するものではない、とデカルトは言いたいのであろう。この説明は現代哲学の「メアリー」の例にも符号するだろう。他方、精神が生得観念を持つなら、なぜ夢のなかで数学の証明をしないのかという質問に対しては、精神は覚醒時の方が身体のくびきを脱してより自由であるから、と答えている。デカルトは夢のなかでも真なる証明をする場合があることを否定しない。「幾何学者が何か新しい証明を発見することがあるなら、眠っているからといってその証明が真でなくなるわけではない」（『方法序説』AT.VI,39）。しかし「われわれの推論は、眠っているときは目覚めているときほど決して明証的でも完璧でもない」（同40）としている。

13) 神を認識していようがまいが、幾何学的なことがらについて疑うことができるという懐疑論者の反論に関しては、神を十分に認識してはじめて明白に理解されるものが真であることが知られる、としている。これは最も重要な論点の一つであるにもかかわらず、デカルトは数行で片づけてしまっている。何度も繰り返し述べられ、論じるまでもないことであったからであろうか。しかし、真理の成立に神が関わるとは一体どういうことかは、永遠真理創造説との絡みで、現代はむろんのこと十七世紀においても容易に了解されない根本問題であった。古代ギリシアの数学者アルキメデスの証明は明晰であるにもかかわらず、なぜ「真の知識ではない」（「第二反論」AT.VII,141）と言えるのか、神を知らなければ疑いの余地が残るとはどういうことを詳論して欲しいところである<sup>9</sup>。

14) 精神が身体とどう結合しているかについては、「第六答弁」第10項の「重さ」の例ですでに示したとする。「人はけものに何もまさるところがない」は、人間の精神ではなく身体に関することである。人間精神は精神を身体なしに十全に認識するが、その能力を欠くとき心身を一つのものとして混乱して認識することになる、と結んでいる。ただ、心身の結合に関する重さの例は必ずしも適切ではない。後に、デカルトはエリザベトに対しても同じ例を使って説明をするが（エリザベト宛1643年5月21日、AT.III,667-668）、逆に批判され（エリザベトからデカルトへ1643年6月20日、同684）、結局、重さは実在的なものではないのでこの例は当たっていないと認めている（エリザベト宛1643年6月28日、同694）。

## デカルトから某氏への書簡 エンデヘスト1641年8月

拝啓

これまでなされた反論は印刷に付されはじめていますので、これから届くかもしれない残りの反論は他の巻にとっておこうと私は決めてはいましたが、しかし、この反論は残る反論のうちの最後のものであるかのように提示されていますので<sup>7</sup>、他の反論と一緒に印刷できるよう、とり急ぎ喜んでお答えいたします。

1. たしかに、実生活に関することがらにおいても、知識の獲得に求められるのと同程度の確実性があることが望まれます。しかしながら、実生活ではそれほど大きな確実性を要求すべきでも、期待すべきでもないことはきわめて容易に証明されます。そしてそれは、人間という複合体はその本性上滅亡しても精神は不滅であり不死であることから、たしかにア・プリオリに証明されますが、しかし、そこから帰結することがらから、より容易に、ア・ポステリオリに証明されます。たとえば、だれかが食べ物に毒が入っていないという確信がないゆえに、食べ物をすべて控えようとし、そのために餓死するとします。そして、何によって生命を維持しているのかが自分には明晰にも透明にも現れてこないの、それを食べる義務はないと思い、それを食べて自分を殺すよりもそれを控えて死を望むほうがましであるとします。その場合、たしかに彼はまるで狂人であり、自分自身の殺害者として非難されるべきです。これとは反対に、彼自身が食べ物としては毒のあるものしかまったく用意できず、しかし彼には、それが毒でなく逆に健康にとてもよいように思われると想定してみます。そしてまた、断食が他の人においてと同様に有害に見えるとしても、その人においては体質上それが健康に役立つようになっていて想定してみます。その場合でも、彼はその食べ物を摂らざるをえず、本当に有益であるもの〔断食〕よりもむしろ有害と思われるもの〔毒入りの食べ物〕を重んじざるをえないでしょう。このことはだれにおいても自明のことですので、他の人が別の見方ができることに私は驚きます。

2. 私は「精神は、子供においては大人におけるよりも不完全にはたらくからと言って、それがより不完全であることは帰結しない」とはどこにも言っており

ません。したがって、それを理由に私が非難される筋合いはありません。しかしながら、それがより不完全であるということもまた帰結しないので、そう主張した人は私によって正当に非難されました。また、私が、人間の魂はどこにあっても、たとえ母の胎内にあってさえもつねに思考していると認めたのは、根拠のないことではありません。というのも、物体の本質が延長にあるように、魂の本質ないし本質が思考することにあるということを私は証明しましたが、これ以上に明晰あるいは明証的な根拠を望みうるのでしょうか？そして、実際、いかなるものもその固有の本質を奪われることはありません。それゆえ、自分が考えていたと自覚したのを覚えていないときに、自分の魂が考えていたことを否定する人に賛同すべきではないと私には思われます。それは、自分の身体が延長を持っていたことを自覚しない間は、その身体が延長するものであったことをも否定する人に賛同すべきではないのと同じです。しかし、だからと言って私は、胎児の精神は母親の胎内で形而上学的な事物について省察をしていたなどと確信しているわけではありません。反対に、はっきりしていないことについて推測することが許されるなら、次のようになるでしょう。すなわち、われわれの精神は身体と結合してほとんどつねに身体から影響されていることを経験していますから、大人の健康な身体において活動している魂は、感覚によって自らに示されるのとは別のものを考える自由を少なからず享受するものの、しかし、病人や眠っている人や子供においては同じ自由はありません。年齢が若ければ若いほど、その自由が少なくなるのがつねです。そして、幼児の身体に結合したばかりの精神は、痛み、快、熱、冷の観念、および、その結合あるいはいわば混合から生じる同様なものの観念のみを、混乱した仕方では認識あるいは知覚することにひたすら専心している、と考えることほど理に適ったことはありません。しかしながら、幼児の精神は、神の観念、自分自身の観念、および自明であるとされるすべての真理の観念を自らのうちに持っており、それは、大人が注意を向けないうちにそれらを持っているのと同じです。というのも、それらの観念は、その後年齢とともに獲得されるわけではなく、身体にくびきを脱すれば自らにおいて見出されるであろうことを、私は疑わないからです。

この説が、われわれをいかなる困難にも投げ込まないことは明らかです。というのも、精神は、身体から

実在的に区別されはいても、それにもかかわらず身体と結合しており、そこに刻印された痕跡によって影響され、また身体にも新たに痕跡を刻印しますが、このことは、「実在的偶有性」が身体とはまったく異なった本性でありながら、身体的実体に作用するということが一般に（すなわちそれを想定する人に）理解されているよりも、より容易に理解されうるからです。そして、これらの偶有性が身体的であると呼ばれることは重要ではありません。なぜなら、もし「身体的」ということが、なんらかの仕方では身体に影響を及ぼすことができるすべてのものを意味するならば、精神もまたその意味で身体的と言わねばならないからです。しかし「身体的」ということが、身体と呼ばれる実体から合成されているものを意味するならば、精神を身体的と呼ぶべきではありませんし、身体から実在的に区別されていると想定されているその偶有性もそう呼ぶべきではありません。そしてただこの意味でのみ、精神が身体的であることが否定されるのが常です。それゆえ、身体と結合している精神自身がある物的なものを考えるとき、脳のある小部分は、あるときは感覚器官を動かす外的な対象によって、またあるときは心臓から脳に上る動物精気によって場所が動かされます。しかし、またあるときは、すなわち精神に固有の自由のみから他の思考へと駆り立てられるときは、その小部分は精神そのものによっても動かされます。そして、この脳の小部分の運動によって痕跡が形成され、それに記憶が依存するのです。しかしながら、純粹に知性的なことがらについては、本来の意味ではいかなる記憶もありません。むしろ、それらは初めて精神に示されるときでも二度目と同じように正しく思考されます。ただし、それは、知性的なことがらは通常なんらかの名前に結びついており、名前は身体的であるので、われわれにそれらをもまた想起させるということがないかぎりにおいてです。しかし、このことについては他の多くのことを考慮しなければならず、ここはそれをもっと詳しく説明する場所ではありません。

3. 「私に属すること、私の本性に属すること、そして私の認識のみに属すること」を私が区別したことから、「私の形而上学が私の認識に属するもの以外の何ものをもまったく立てていないこと」や、ここで反論されている他のことを、けっして正当に推論することはできません。なぜなら、私がどうの場合に認識のみを扱ったか、そして何時ものごとの真理そのものを扱ったかを、読者は容易に識別することができるか



らです。また、私は「知ること」について語るべきところで「信じる」ということばを、どこにも使っておりません。また、引用されたその箇所においてさえも「信じる」ということばはありません。そして「第二反論への答弁」において、私は「われわれは神によって超自然的に照らされているので、信じるように提示されているものは神によって啓示されているという確信を持っている」と言いました。なぜなら、そこでは人間的な知識ではなく信仰が話題であったからです。また、私が主張したのは、恩寵の光を通して「われわれは信仰の秘蹟そのものを明晰に認識する」ということではなく（もっとも私はそれがありうることを否定しておりませんが）、むしろただ「われわれは秘蹟を信じるべきであると確信している」ということです。ところで、神によって啓示されたものは信じるべきであり、恩寵の光が自然の光に優先すべきであるということはきわめて明証的であり、カトリックの信仰を真に有する人ならだれもそれを疑ったりそれに驚いたりすることはできません。そして、ここでそれに続く質問は私には関与しておりません。なぜなら、私の著作においてはそれらについて質問されるようないかなる機会も与えなかったからです。そして、以前すでに「第六反論への答弁」<sup>8</sup>で私はそうした質問については答えないであろうと宣言していますので、何もつけ加えることはありません。

4. この第四の反論が根拠としていること、すなわち「私の確実性の頂点は、われわれがあるものについて考えれば考えるほど、それをますます真であると判断するほどに明晰に認知する、とと思っているときにある」ということを、私はどこにも書いていません。したがって、それに付加されたものに答える義務は私にはありません。もっとも、信仰の光を自然の光から区別し、前者を後者に優先させる人にとって、答えることはきわめて容易ではありますが。

5. 第五の反論が根拠としていることもまた、私はどこにも書いていません。そして、「もの」とは何であるか、「思考」とは何であるかをわれわれは知らない、あるいはそれを他人に教える必要がある、ということ私をまったく否定しています。なぜなら、それはこれ以上明晰に説明するものは何もないほど、きわめて自明であるからです。最後に、私は「われわれが考えているのは物体的事物にほかならない」ということを否定します。

6. 「われわれに無限が理解されるのは限界の否定

によってではない」ということはまったく本当です。そして「限界は無限の否定を含む」ということから、「限界の否定は無限の認識を含む」ということが誤って推論されています。なぜなら、無限を有限から区別するものは実在的で積極的なものですが、他方、有限を無限から区別するところの限界は非存在すなわち存在の否定であるからです。ところで、存在しないものが、存在するものの認識にわれわれを導くことはできず、むしろ反対に、その否定が知られるべきなのは、ものそのものの認識からです。そして、私が522ページ<sup>9</sup>で、無限を理解するためには、いかなる限界によっても囲まれていないことが理解されれば十分であると言ったとき、私は最も通例の言い方に従いました。それはちょうど、私が「無限」という名前を保存した場合、すべての名前がものの本性に合致していることをわれわれが要求したならば、それはより正しくは「最も広大な存在者」と呼ぶことができるのと同じです。しかし、慣例上それは否定の否定を通して表現することが要求されていました。あたかも、極大なものを指示するのに、私が、小さくはないとか、まったく小ささをもたないと言うかのように、です。しかし、私はこれによって、無限の積極的な本性が否定によって認識されることを意味していません。それゆえ私はまったく何も矛盾しておりません。

たしかに私は、精神のうちに事物の観念を増大させる能力があることを否定しませんでした。しかし、精神そのものが神においてあるのでなければ、精神のうちにそのように増大されたそれらの観念はありえず、またそれらをそのような仕方でも増大させる能力もありません。神のうちには、その増大を通してわれわれが到達することができるすべての完全性が実際に存在しています。このことを私はしばしば徹底させました。そして、そこから、あらかじめ原因のうちになかったものは結果のうちにはありえないことを証明しました。この点できわめて繊細な哲学者たちとして通っている人のだれも、原子がそれ自身においてあるとは考えません。なぜなら、他のすべてのものから独立であるような最高の存在者は一つとしてありえないことは、自然の光によって明らかであるからです。

そして、独楽は自分で回っている間「自分自身を動かすのではなく」ムチがなくても、ただそれによって作用を受けると言われるとき、私が知りたかったのは、一つの物体がそこに存在しない他の物体からいかなる仕方でも作用を受けることができるのか、いかにして能

動と受動とが相互に区別されるのかでした。というのも、あるものがそこに存在しないものから（そしてまた、たとえば独楽がムチの一打ちを受けたすぐあとでムチがそこに存在することをやめるとするなら、もはや存在しないと仮定することができるものから）いかにして作用を受けるのかを把握できるほど、私は繊細ではないことを告白するからです。また私は、いまや世界にはいかなる能動もなく、なされたすべてのものは世界の最初の始まりに生じた能動の受動であるということが、なぜ同じ権利で言われえないかが分からないからです。しかし、能動も受動も一つの同じ事態であり、それは「そこから」という語に関与させられるときは能動と呼ばれ、「そこに向かって」あるいは「そこにおいて」という語に受け取られるときは受動と呼ばれる<sup>10</sup>、と私はつねづね思っていました。したがって、どんなに短い時間の間においても、能動なしに受動があるとするのは明らかに矛盾しています。

最後に、「物的事物の観念」が「人間の精神から産出される」ことを私は認めます。また、あなたが反論されているように、目に見えるこの世界のすべてではなく、目に見えるこの世界にあるかぎりの事物の観念が、人間の精神から産出されることも、たしかに認めます。しかしながら、事物の本性において[現実]に]物的なものが存在するかどうかをわれわれは知ることができない、ということがそこから正当に推論されるわけではありません。また、そこから困難が導かれるのは、私の意見によってではなく、そこから導出される間違っただけの推論によってであるにすぎません。というのも、私が物質的事物の存在を証明したのは、われわれの内にそれらの観念があるということからではなく、それがわれわれによって作られたのではなく他所から到来したことを意識するという仕方、われわれに到来しているということからであるからです。

7. ここで私が言っているのは、第一に「太陽の光がそのポーニャの石に保存されない」ということではなく、太陽光線によってその石のなかに新しい光が灯され、その後それが闇のなかでも見えるということです。第二に、そこからどんなものでも神のはたらきかけなしに保存される、ということは正当に帰結しないということです。なぜなら、たとえ真なるものが偽なる例として示されることがしばしばあるにせよ、しかし、いかなるものも神の協力なしに存在しえないことは、太陽なしにはいかなる太陽の光もないことよりも、はるかに確実であるからです。また、もし神が

その協力をやめたなら、すべて創造されたものはただちに無に帰するであろうことは疑いありません。なぜなら、それらが創造され、神の協力が与えられる以前には、それらは無であったからです。だからといって、それらを実体と呼んではならないわけではありません。なぜなら、われわれがそれ自身で存続している被造の実体について語るとき、だからといって存続するために必要な神の協力を排除しているのではなく、むしろそれは、単に他のすべての被造物なしにも存在しうるものであることを意味しているからです。しかし、図形や数などの事物の様態については同じことを言うことはできません。もし、そうした事物がその後は神なしにも存在しうるようにつくられたとしても、神の力の広大さが誇示されるわけではありません。むしろ反対に、いったん造られたものがもはや神に依存しないということで、神の力の有限さが示されることになったでしょう。また、神はその協力をやめるのは別の仕方では何かを破壊することはできないと私が言うとき、私は自分が用意した陥穽に陥ってはおりません。なぜなら、さもなければ神は積極的な行為によって非存在へと向かうことになるからです。というのも、神の積極的な行為によってなされるもの（そのすべてはきわめて善なるものとならざるをえません）と、積極的な行為をやめることによって生じるもの（たとえば、すべての悪、罪、そして何か存在するものが破壊される場合には存在者の破壊）との間には大きな相違があるからです。また、三角形の本性についてあなたがつけ加えていることは、なんら私を圧迫するものではありません。なぜなら、私が神あるいは無限に関してさまざまところで強調したように、われわれが考察すべきなのは全体を理解できないことがらではなく（われわれはそれを理解しうるはずがないことを知っているからです）、むしろただ、われわれが何らかの確実な根拠によって達する[ことができる]ことがらだからです。しかし、そうした真理がどういう種類の原因において神に依存するかを知るためには、「第六反論への答弁」の第8項<sup>11</sup>をご覧ください。

8. ここで私に属するとされていることを、私は書いた覚えがありませんし、考えた覚えもありません。

9. また、「すべての人が神の観念を自分で知覚しているわけではない」ということに、私が驚いた覚えもありません。なぜなら、人々が判断したもの[そう思ったもの]と知性で理解したものとでは違うことに私はしばしば注意していたからです。すべての人が少な

くとも潜在的な神の観念を、つまりその観念を顕在的に認識する傾向性<sup>12</sup>を自分において持っていることを、私は疑わないにしても、しかし、それを自分で持っていることを知覚しないこと、あるいは気づいていないこと、あるいは私の『省察』を千回読んだ後でもおそらくまだ気づかれないことに、私は驚かないでしょう。そこで、彼らは空虚と呼ばれる空間が無であると判断するとき、それにもかかわらず、それを積極的なものと理解するのです。そこで、彼らは「偶有性」が実在的であると考えるとき、それを実体とは判断しなくても、実体であるかのように表象するのです。そして、しばしば他の多くのものにおいて人間の判断はその認識とは違うのです。しかし、明晰判明に認識するものについてでなければいかなる判断も下さない（私はできるかぎりつねにそれを守っています）人は、同じものについて、あるときと別のときとは判断が違うことはありえません。しかしながら、たとえ「明晰で不可疑であるものは、より頻繁により注意深く考察すればするほど、より確実に思われる」<sup>13</sup>とはいえ、しかし私は、このことを確実性の明晰で不可疑なしとしてどこかで提起した覚えはありません。また、彼がここで述べている「つねに」ということがどこにあるのかを知りません。ただ、私が知っているのは、あることがわれわれによってつねになされると言う場合、この「つねに」はふつう永遠を意味しているのではなく、単にわれわれがそれをする機会が生じてくるたびごとに、ということの意味していることです。

10. 「神の目的はわれわれには知りえない」ということは、神が目的自体を啓示しないかぎり自明なことです。そして、道徳においてそうであるように、われわれ人間に関してはすべてが神の栄光のためになされたことは、たしかに真ではあります。なぜなら、もちろん神はそのすべての業がわれわれから称えられるべきであるからです。そしてわれわれを照らすために太陽がつくられたことも真ではあります。なぜなら、われわれは太陽に照らされていることを経験しているからです。しかしながら、ある人が形而上学において、あたかもあるきわめて高慢な人間のように、神は宇宙をつくる際に人間から称えられる以外の目的を持たなかったと信じ、そして、地球よりも何倍も大きい太陽が、地球のごくわずかな部分を占めている人間に光を与えること以外の目的では創造されなかったと信じるなら、それは子供じみており、バカげたことです。

11. ここでは意志のはたらきと知性のそれとが混同

されています。なぜなら、意志に属するのは理解することではなく、ただ欲することだけだからです。そして、すでに前に私が認めたように、なんらかの仕方でも何かをわれわれが理解しているのでなければ、われわれは何も欲しないとはいえ、しかしながら、経験は、その同じものをわれわれは認識できる以上に欲することができることを十分に明示しています。また、虚偽が真理の相の下に把握されることもありません。われわれの内に神の観念があることを否定する人たちは、おそらくそれを認め、信じ、主張するにしても、そのこと自体を理解していないのです。なぜなら、続く第9項で私が注しておいたように、しばしば人間の判断は彼らの認識あるいは把握とは異なるからです。

12. ここで私に反対しているのはアリストテレスとその徒の権威だけであり、また、私が信用しているのは彼らよりも理性であることを隠しだてしませんので、答弁することにさほどの労は要しません。

さて、生まれつき盲目である人が色の観念を持つかどうかは、少しも重要ではありません。この件について盲目の哲学者の証言を援用してもムダというものです。なぜなら、たとえ彼が色についてわれわれが持っているのとまったく似た観念を持っているとしても、しかし、それがわれわれのものに似ていることを知ることができず、したがってそれを色の観念と呼ぶことはできません。なぜなら、彼らはわれわれの色がどういうのかを知らないからです。また、ここで私がどういう権利で劣っているかが分かりません。なぜなら、かりに精神が不可分であるとしても、だからといってそれがさまざまな性質を獲得する能力において劣ることはないからです。また、精神が夢でアルキメデスの証明に似たいいかなるものも作り上げることがないことは驚くに値しません<sup>14</sup>。なぜなら、精神は夢においては身体と結合したままです。覚醒においてよりもより自由であることは決してないからです。また、長く覚醒している脳が、そこに刻印されている痕跡を保持するためによりよく配置されているわけでもありません。むしろ、覚醒時と同様に睡眠時においても、その痕跡は強く刻印されればされるほど、それだけよく保持されます。したがって、われわれはときとして夢もまた思い出しますが、しかし、目覚めているときに考えたことの方をよりよく思い出します。こうしたことの根拠は「自然学」において明らかにされるでしょう。

13. ここで私が、神は「それ自身の存在」であると



言ったとき、私は神学者たちが最もよく使う論法を使いました。それによれば、神の本質には存在することが属すると理解されています。しかし三角形については同じことを言うことができません。なぜなら、三角形の本質のすべては、事物の本性においてなんら想定されない[現実にはありえない]としても、正しく理解されるからです。

ところで、もし神が然るべく知られていたならば懐疑論者は幾何学的な真理を疑わなかつただろう、と私は言いました。なぜなら、それはまったく明白であるので、もし明白に理解されるもののすべてが真であることを知っていたならば、それを疑うなんの機会もなかったからです。ところで、このことは神を十分に知ることのうちに含まれています。そして、それ自身は彼らの準備が及んでいない領域です。

最後に、線は点から成るのかあるいは部分から成るのかという問題は、ここではなんの関係もなく、ここはそれに答える場所でもありません。しかし、ただ注意しておきますが、543ページのこの引用箇所<sup>15</sup>で、私はなんであれ幾何学に属するすべてのものを語ったのではなく、懐疑論者がそれを明晰に理解はしていてもその証明について疑ったものについてのみ語ったのです。また、懐疑論者が「この悪い霊が力のかぎり私を欺くがよい…」と言うのはここでは正しい引用ではありません。なぜなら、そう言う人はすべてを疑っているわけではないので、それによってだれもが懐疑論者にはなるわけではないからです。むしろ、私はそうした懐疑論者自身が、ある真理を明晰に認識している間は進んでそれに同意することをけっして否定しませんでしたし、彼らがすべてを疑うべきだとする異端的な説に固執したのは、ただ「懐疑論という」その名において、そしておそらくは意志と決心においてのみであることをけっして否定しませんでした。しかし、84ページと344ページ<sup>16</sup>でご覧のとおり、私が言っているのは、ただわれわれが以前に明晰に認識したことを思い出しているものについてであり、現在において明晰に認識しているものについてではありません。

14. 「いかにして精神は延長を持った身体と延長を共にするのか」。精神は真の延長、すなわち場所を占めそこから他の延長を排除するようないかなる延長ももたないのに。これについては、すでに私は実在的性質と見なされた重さの例<sup>17</sup>をあげて先に説明いたしました。そして「伝道の書」が「人はけものに何もまさるところがない」と言うとき、それはただ身体につい

てのみ語っているのです。というのは、それは「だれが知るか、アダムの子らの精神が…かどうかを」<sup>18</sup>ということばで、精神を切り離して扱っていることもまた、私はすぐあとで示しておきました。

最後に、「われわれは身体なしに精神を把握するようには、一方を他方なしに把握することはできない」のか？ それとも「われわれは一方を他方なしに十全に把握する」のか？ このどちらの認識の仕方がより不完全で、われわれの精神の無力さをよりよく証拠だてるのかを識別するためには、これら二つのうちのどちらが、その能力を欠くと他方の原因になるところのある積極的な能力に由来するのかを考察しなければなりません。なぜなら、精神の能力は実在的であって、それによって二つのものを、一方を他方なしに、十全に把握することは、容易に理解されるからです。そして、その能力の欠如によって、精神はこれら二つのものをあたかも一つのもののようにただ混乱して把握するのです。それゆえ、視覚においては、すべてを同時に、あたかもただ一つのもののように知覚するときよりも、対象の各小部分を綿密に区別するときの方に、より大きな完全性があります。だれかが目がぐらついで、酔った人にしばしば起こるように一つのものを二つのものとみなすと仮定します。そして、哲学者たちがときとして区別をして（私が言っているのは本質と存在との区別ではありません。なぜなら、彼らはそれら二つの間に実際とは別の区別を想定しないのがつねですから）、同じ物体のうちに物質や形相やさまざまな偶有性を、それだけ多くのさまざまなものがあるかのように認識すると仮定します。そのとき、彼らがもしものごとに入念に注意を向け、自分たちがこのようにさまざまだと想定しているさまざまな観念をけっして持っていないことに気づくならば、曖昧で混乱した知覚によって、それが積極的な能力からだけでなくある欠如した能力からも生じることを、容易に理解することでしょう。

その他には、もしこれまでわれわれが十分説明しなかったすべての個所がこれら反論で明らかにされたなら、私はその著者に負うところが大きいです。その労によって、これ以上の反論はもうないものと期待する正当な機会を私は持つこととなりますので。



注

- <sup>1</sup> アダン・タヌリ版デカルト全集 (*Œuvres de Descartes*, publiées par Charles Adam et Paul Tannery, 12 tomes, J.Vrin, Paris, 1996.) 第3巻421-435ページを意味する。なお、この書簡はベルジョイオーズ版 (G.Belgioioso, *Tutte le lettere*, Bompiani, Milano, 2009.) の324番, pp.1514-1527に相当する。
- <sup>2</sup> 『名古屋文理大学紀要』第11号, 2011, pp.35-46.
- <sup>3</sup> 同 p.36.
- <sup>4</sup> G. レヴィスはつとにその重要性を指摘して、テキストの校訂をしている。G. Lewis éd., *Descartes, Correspondance avec Arnauld et Morus*, J.Vrin, 1953, pp.5-59.
- <sup>5</sup> 上記『名古屋文理大学紀要』pp.35-38.
- <sup>6</sup> 筆者もかつてこの問題を論じたことがある。拙著『デカルト哲学の根本問題』（知泉書館2001）pp. 63-75.
- <sup>7</sup> 反論書簡の冒頭部分 (AT.III,398) を踏まえている。
- <sup>8</sup> AT.VII,428以下。
- <sup>9</sup> 「第五答弁」AT.VII,368.
- <sup>10</sup> 能動と受動とが、身体だけでなく精神のレベルでも同一であることは、後の『情念論』第一部第一項 (AT.XI,327-328) で展開される。
- <sup>11</sup> AT.VII,435-436.
- <sup>12</sup> これは生得観念に対する重要な説明である。「生得的」とは、生まれつきある観念をつねに持つということではなく、機会があればいつでもその観念を顕在化できる「能力」（「第三答弁」AT.VII,189）あるいは「傾向や資質」（『掲貼文書への覚え書』AT.VIII-2,358）を持つ、という意味である。
- <sup>13</sup> これはX氏の反論第九項 (AT.III,408) に対応するが、もともと「私がより長くより注意深く吟味すればするほど、それだけより明晰により判明に、それらが真であることを私は認識する」（「第三省察」AT.VII,42）を踏まえていると思われる。しかし、これは明晰な認識の指標にはならないことになる。
- <sup>14</sup> デカルトは夢のなかでも真なる証明をする場合があることを否定しない。「幾何学者が何か新しい証明を発見することがあるなら、眠っているからといってその証明が真でなくなるわけではない」（『方法序説』AT.VI,39）。しかし「われわれの推論は、眠っているときは目覚めているときほど決して明証的でも完璧でもない」（同40）としている。
- <sup>15</sup> 「第五答弁」AT.VII,384.
- <sup>16</sup> 現在、明晰に認識しているものは疑えないが、過去

において認識したことを想起しているときは、神の保証がない場合には疑える、という趣旨である。「第五省察」AT.VII,69,「第四答弁」AT.VII,245-246.

<sup>17</sup> 「第六答弁」AT.VII,441-442.

<sup>18</sup> 旧約聖書「伝道の書」3:19-21,「第六答弁」AT.VII,431.

